

三島由紀夫『絹と明察』論

— 駒沢とコミュニティの関わりについて —

(1)

『絹と明察』は昭和三十九年一月から十月にかけて「群像」に発表された三島中期の長編である。昭和二十九年に起きた近江絹糸人権争議（以下、争議）を題材として書かれており、『金閣寺』（昭和31・1）10「新潮」、『宴のあと』（昭和35・1）10「中央公論」といった、三島が得意とする、いわゆるモデル小説に属する。発表年には毎日芸術賞を受賞したこの長編に対し、自身で「最近五、六年の総決算をなす作品」¹、「二度と書けぬ力一杯の仕事」といったような言及をしているほか、ジョン・ネイスンに翻訳の依頼を行っていることから、それなりの手応えと自信があったことが窺えるだろう。加えて、同時代評でも割合に高い評価が下された。ところがこの作品は、数多くの、そして概ね高い評価を下した同時代評の割に、以後の研究論文が少ない。管見の範囲ではあるが、単独でのまとまった論考は、杉本和弘、林進、竹松良明、佐藤泉、島内景二ら⁴、教えるほどしかない。そんな中、注目すべきは島内の論考であろう。粉本として使用された三島旧蔵書のうち、高宮太平「夏川嘉久次と紡績事業」ほか三冊⁵を検討し、モデル事件から、三島が何を取捨選択したのかについての詳

九内 悠水子

細な分析を行っている。島内が主に検討を加えたのは、高宮の前掲書であったが、この本は駒沢のモデルとなった夏川嘉久次の依頼を受けて執筆されたものであり、駒沢寄りの内容となっている。三島が『絹と明察』を書くにあたり、この本に拠ったところが大きいことは今更疑似ようがない。というよりも、参考というレベルを超えるほどに酷似している箇所があることは、猪木武徳⁶によって既に指摘されている。しかし一方で、三島は組合側からの視点も抜かりなく考慮に入れている。大槻のモデルとされる朝倉克己氏は、近年出した著書⁷の中で、三島が取材旅行で来彦した際取材を受けたことを述懐している。絹紡工場では自ら作業体験を希望、作品舞台となる彦根の町は丹念にスケッチし、工場での様子を熱心に聞いてはメモに書き留める姿を見た朝倉氏は、その作家魂に深く感動したという。『絹と明察』のベースは、ほぼこの二つ（高宮「前掲書」と朝倉氏への取材）によって決定されたといっても良いだろう。加えて近年、上野輝将によって、争議を相対的にまとめた研究書⁸が出された。その前景、発生と拡大の過程、もたらした影響、と多岐に渡る目配りがなされ、これによって全体像がほぼ明らかになったと言える。

争議は、昭和二十九年五月二十五日、大阪本社に御用組合⁹とは別の、

近江絹糸紡績労働組合が結成されたことよって始まる。同年六月二日の決起大会、無期限ストに続き、七日の彦根工場スト、九日の富士宮・中津川工場スト、十二日の津工場スト、二十六日の名古屋営業所スト、二十七日の長浜工場スト、と運動は拡大していった。中でも会社発祥の地である彦根工場は、それまで幾度となく専制体制に対する反発（と挫折）を繰り返してきたという歴史を持ち、この争議においても重要な役割を果たした。しかしながら運動全体を俯瞰するときには、彦根はあくまでも、本社を中心に一斉蜂起した各工場の一つという位置にしか過ぎないであろう。ところが三島は『絹と明察』において、彦根工場のみを舞台を限定し描いている。この点について杉本は「『古きよき日本』という見慣れた、馴染みやすい『日本』のステレオタイプ、あるいは『日本』の家郷の「典型」⁽¹⁰⁾として、また島内は「彦根工場の争議指導者としての大槻の存在感が高まる」、「三島の心の奥底のヘルダーリン嗜好が、琵琶湖畔の彦根を小説の舞台として選び取った」といった見解を示している。それらはいずれも至極もつともなのであるが、理由としてはいささか漠然としている。少なくともなぜ彦根だったのか、という問いに対する積極的な答えではない。

三島は地方を描くとき、例えば『潮騒』（昭和29・6 新潮社）や『美しい星』（昭和37・1〜11 新潮）などにおいて、詳細な取材を行ってきた。そしてまた、その場に潜む歴史性を念頭に置き創作を行ってきたことは拙論⁽¹²⁾で言及してきた通りであり、とすれば、本作においても、選択された場が持つ意味は決して軽くはないはずである。モデル小説ではあるのだが、作者は明らかに彦根という場を選び取っている。そこで論者は、この彦根、あるいは近江という気風、あるいは場か

ら、三島がどのような意味を掴みだし、その意味を物語にいかにつ与していったのかを明らかにすることにした。人物造型、あるいは物語のテーマと、選び取られたこの場がどう関わってくるのかについての考察である。方法としては、史実との相違に着目し、分析していくことにした。最終的に、中期三島作品の創作方法の一端を解明することが、本論の目指すところである。

(2)

古代・戦国の時代には近江に首都が置かれた。交通・経済・政治において重要な意味を持ち、今谷明は「近江史を書くことは、すなわち日本通史を著すのと同じ意味」⁽¹³⁾であるとまで言っている。近江は「日本の『東西の巷』であり、古代から地政学の要の地位にあった。古代・戦国の時代には首都が置かれ、また経済的には常に奈良・京都・大阪の穀倉であった」⁽¹⁴⁾。そんな地が生み出す気風とはどのようなものであったのだろうか。またそれは、駒沢の造型にいかに関わっているのだろうか。

モデルとなった争議と本作とを比べると、駒沢の戦前がほとんど描かれていないということに気づかされる。高宮「前掲書」には、夏川の祖父英三、父熊次郎からはじまった絹織物業との関わり、病気のため学業を断念し家業を継いだ若き日の姿、父の死と会社引き継ぎに伴う苦労など、本格的な経営に携わる前の部分にかなりの紙幅を費やしている。また、戦中一時期、絹を離れ、軍需産業に関わっていた経緯なども詳しく書かれている。三島も当然眼に入れたはずであるが、こ

のあたりはばつさりとカットされているのである。
夏川と軍需産業の関わりについては、経済誌「ダイヤモンド」⁽¹⁵⁾に次のように書かれてある。

彼ほど今次大戦を百パーセント利用したものはあるまい。戦争中の金儲けは、あえて驚くにあたらないが、敗戦を見事に逆利用した点は、流石に凡人でないことを物語る。

彼は戦争中、海軍のキモ入りで近江航空という会社を創つた。飛行機の部品製造会社であるが、これはたいして儲からなかつたようだがもともと畑違いの仕事であり、設備も技術もないところから出発したのだから、無理もない。しかし時代のバスに乗り遅れては大変と更に、これをキツカケにして、新しい運命を切り開いてゆくという彼一流の強引な見透しを樹てたようだ。又、彼にしてみれば、必らずモノにしてみせる、という強い自信があつたであろう。

果せるかな、この自信は見事に結実した。海軍納入の落下傘製造に、大きな利益を収めたといわれる。

またこの号には、事情を知る某氏の話として、夏川が終戦直後に莫大な利益をあげたこと、それは海軍の遺した高級絹糸を、戦後の繊維飢饉に便乗して売りさばいたためであることを載せ、「一般が虚脱状態で傍観しているさ中に」抜け目なく動いた夏川の人となりとを暴いて「近江商人といえ、『近江ドロバウ、伊勢コジキ』といわれる」⁽¹⁶⁾ほどに、商売のためには手段をえらばぬ、たくましい商魂の持ち主で

あるとされるが、まさに夏川はそれがびつたりあてはまる。しかし一方でこの抜け目なさは、地元を敵を作る原因ともなつた。近江絹糸は本社集権主義であり、資材購入、製品販売、人事等あらゆる決定を本社に委ねなければならなかつた。よつて各地にある工場での采配というものが効かず、地元銀行との取引もほとんどない。工場の日用品も、地元から賄おうとはしない。ために、地元ではすこぶる不人気で、彦根市の人々は、「夏川さんはこの土地の成功者であるが、町のために何ひとつやつてくれない。寄付らしい寄付はやつたことがない。又、町から物を買おうとしないし、宴会もやらない。若し物を買うときは、値切つた挙句くに、支払いまで渋る。しかし数が纏るのでイヤイヤながら納めるわけで、決してよいお客ではない」⁽¹⁷⁾などと噂をしていたという。こういった夏川の経営方針は、岡野が拾う「あそこの子には、可哀想に、うちとこみたいな高級品は買へんですわ。ガリガリ社長に搾り取られてるさかい」(三)といった町の声や、「彦根の商人も百姓もみなすれつからして、駒沢紡績に悪意を持つてをり、値を釣り上げてくる傾向が甚だしい」(二)ため地元での購入はしない、といった部分に反映されている。しかしここでは、巧みな商売人としての駒沢ではなく、有力企業でありながら、彦根というコミュニティから孤立しているところに重点が置かれている、と見るべきだろう。近江商人としての駒沢を描くなら、軍需産業との関わりに触れないのは不自然だからである。駒沢を造形するにあたって三島が意識したのは、地元を馴染まない、孤独な存在という部分であつた。

争議の核心部分でありながら本作においてほとんど採用されなかつたものがもう一つある。それは、宗教であつた。争議において、組合

側は二十二項目の要求を掲げ、特に彦根工場では、「仏教の強制絶対反対」、「寮對抗の一切の生産競技の廃止」、「外出の自由を認めよ」、「学校選択通学の自由」、「最低賃金の確保」、「退職金制度確立」、「責任者の身分を保障」という七項目の要求を行った。『絹と明察』ではこれが、「われわれの駒沢紡績労働組合を即時認めよ」、「会社の手先である御用組合を即時解散せよ」、「会社が指名せる労働者代表の締結せる一切の規定を撤回せよ」、「拘束八時間労働の確立」、「夜間通学等教育の自由を認めよ」、「結婚の自由を認めよ」、「外出の自由を認めよ」(一六)となっている。三島は、大槻らの運動を描くにあたって、宗教に関する要求を盛り込むことはしなかった。昭和二十九年六月十三日における市中デモの写真には、「仏教の強制教育 絶対反対」と記された筵旗⁽¹⁸⁾が写っており、この争議の重要な論点であったことがわかる。

近江絹糸では従業員が東北、北陸、信越、山陰、四国、九州といった全国各地から入社していた。会社の方針として近況在住の人間は移動が激しく、遠方より来た者のように落ち着けないということで積極的に採用されなかったためである。そしてまた九州地方からの入社者にはキリスト教徒も少なからず居たという。彼等にとつて「宗教的生活習慣、更には生活基盤の精神的支柱を根底から変えさせられる」⁽¹⁹⁾ことは相当な精神的苦痛であり、要求項目の中にこの問題が入っていたのは当然のことだったと言える。

夏川自身は熱心な浄土真宗信徒であった。父方の祖母は奈良にある浄土真宗本願寺派明照寺の娘であり、母が彦根の仏壇商の娘という家庭環境の元で育っている。そもそも会社に宗教を持ち込んだのは、近江絹糸の基盤を築いた父熊次郎だった。彼は折に触れ僧侶を招き、従

業員と共に説教を聞いていたのだが、夏川はそれを社員の教育に応用しようと考えた。これは、取引先であった群⁽²⁰⁾はへ工場視察にいった際の発見によるところが大きい。品質の良い糸を生み出す群⁽²⁰⁾の工場、寄宿舎は、見事なまでに整理整頓・掃除が行き届いていた。

原料の見分け、買付け、経済界の見通し、そんな点については夏川には自信がある。然し、人間を作ることとは一朝一夕では出来ない。今日までどうにかやって来たのは、熊次郎の人徳によるものが多かった。けれども、熊次郎より遙かに若い夏川では、まだそれだけの徳は積んでいない。従業員の見る眼も父と子とは自ら違う。これは何としても宗教により、教育によつて従業員の情操を高め、専務が号令をかけなくても、自発的に従業員が自己の職分に忠実になるようにすべきだ。郡是製糸はキリスト教によつて教育をしている。近江絹糸は仏教によつて実践してみよう。⁽²⁰⁾

夏川は懇意にしていた西本願寺の松原致遠を招き、定期的に法話を聞かせることにした。毎月一週間から十日ほど、松原は近江絹糸彦根工場に逗留し、講演や個人説教を行った。「会社の社報にはほとんど毎号筆を執る。従業員の心得となるべき『仏の教へ』とか『日常清規』『社歌』などは概ね松原氏の手になる」と⁽²¹⁾といった具合である。例えば社歌は次のようであった。

大慈大悲のみほとけの／知慧のひかりに照らされて
まよいの暗をはらしつつ／この世あの世のわかちなく

身も世もなべてみ仏に／うちまかせてぞすすみなん
 このおほいなる御めぐみを／朝な夕なにおもひいで
 大御ころをころとし／ころあわせて人のため
 世のためつくす一すじの／道こそ吾が社のつとめなれ⁽²²⁾

「絹と明察」にも社歌の一部が登場する。「湖畔にそびゆる絹の城／勇むは白き紡績の駒……」(二)という文句は三島の創作であろう。物語から宗教色を抜いたために、このような歌詞になったと思われる。ではなぜ、三島は宗教を持ち込まなかったのだろうか。島内は⁽²³⁾その理由を『絹と明察』における駒沢は、仏教徒としてよりも、言わば「日本教」の宣教師(あるいは神主)として造型されている。駒沢善次郎の信奉する最大理念である『報恩』は、仏教の教義をはるかに超えている⁽²⁴⁾ためと解釈している。十分に首肯できる見解であるが、駒沢を日蓮宗として改変している点の説明がそれだけでは付かない。東北出身の菊乃は、駒沢が同じ宗派であることを知り、親しみを感じているが、そもそも日蓮宗と浄土真宗とは全国的に見ても、圧倒的に信者数が違う。小田匡保によれば、昭和三十四年の滋賀県における寺院割合は、天台・真言宗系が16・3%、浄土系が68・8%、禅系が13・3%、日蓮系が1・5%となっている。東北においても、青森の13・4%、秋田の9・4%を筆頭に軒並み4〜6%ほどしかない。先に駒沢が地元で馴染まない、孤独な存在であることを見てきたが、この宗教の問題もそこに関わってくると思われる。圧倒的に浄土真宗門徒の多い近江の地で、それに属さない駒沢という図式である。

三島は、商売のスタイル、宗教等、近江の気風に同化しない、孤高

の駒沢を造形していったと言えよう。一方で、この問題に関する史実との改変部分も気になるところである。例えば、近江絹糸が戦中戦後において軍需産業と深く関わっていた点である。この事実に関しては、駒沢の妻房江を描写するくだりでさりと「戦争中、会社が軍需産業に転身した」(四)と触れるに留まる。三島はこの問題を物語には持ち込まなかった。また、宗教問題に関しても先に述べたように、争議の重要な論点であったにもかかわらず、外された。上野は、⁽²⁵⁾「夏川社長はその兄弟重役以下一般労働者にいたるまで自己を畏怖させ絶対的服従を強いる家父長的専制支配を続けて」きたこと、また「その支配は、戦前は軍部、戦後は引き続き皇室や西本願寺の権威をも利用しながら維持されてきた」ことを指摘している。本作において軍需産業への転身や宗教問題が、物語に深く書き込まれることがなかったのは、どこにも拠らない存在としての駒沢を描くためであっただろう。

(3)

近江における駒沢の立ち位置は先に確認した。では、大槻、弘子といった工員たちはこの地とどのような関係にあるのだろうか。『絹と明察』は、この二人の出身地に関わる次のような記述がある。

南九州から来た大槻と東北から来た弘子といふ風に、それぞれ出身地のちがふ駒沢紡績の工員のあひだでは、駒沢紡績語とでもいふべき、ほとんど標準語にちかい共通語が生れてゐた。二人ははじめから、この言葉で恋を語り、国の言葉を話すのとはちがつ

た或る違和感と、かすかな気取りとが、恋の言葉にふさはしく思はれたのだった。(四)

大槻のモデルとなった朝倉氏は、昭和二十五年に中学を卒業し、その一週間後に近江絹糸彦根工場の正門をくぐった。氏は鳥取の出身であったが、物語では設定が変えられ、南九州とされている。これは、地理的な位置を踏まえてのものだろう。列島の中心とも言うべき場所にある近江絹糸彦根工場には、全国各地から中学を卒業したばかりの工員達が集められていた。出身地の多くは農業県であり、農家の出身が七割強を占めていたという。ちなみに、会社では、全国から来た工員を意図的に各地の工場に散らばらせていた。昭和二十五年に入社した東北出身の女性は次のような証言をしている。

一緒に集団就職で来た人でも、のこったのはわたしだけなんです。中津川に回されたり、大垣や岸和田に回されたり。そういうふうにはばらばらにして。一緒にいたら危ないって、そういうのがわかってる上でばらばらにしたと思うんですよ。

先に述べたように近江絹糸では近隣の県から工員を採用することは殆どなかった。すぐ逃げ帰れるようなところからではなく、辛抱するしかないような遠隔地からの者のほうが都合がよかったからである。小林多喜二は「蟹工船」(昭和4・5・6『戦旗』)において「かういふてんくばら／＼のもの等を集めることが、雇ふものにとつて、この上なく都合のいいことだった」と書いている。資本家たちは、労働

者の連携(組合の立ち上げ)を嫌い、彼等が団結できないよう、出身も立場も違う乗組員たちを各地から雇おうとするが、夏川の考えもこれとほぼ同じであった。本作において、彦根工場に東西から工員が集められたことは、この土地における彼等が孤独な立場であることを意味する。地元出身でありながら孤独な存在の駒沢と、地方出身の孤独な工員たちという構図がある。その上で、駒沢を父とする擬似的な親子関係が成立している。駒沢はニューヨークに居ても、「外国の風土の違和感と戦ひながら、たえず日本に残してきた『家族たち』のことを語る」(五)。しかし親の思いは子に通じず、関係は崩壊してしまつた。地方からの、いわばよそ者であった工員たちは、世間の同情を買ひ、皮肉にもこの地に受け入れられることになる。

駒沢の食堂封鎖が一そう問題をこじらせ、組合に対する世間の同情を呼び、工場ではまた、製品運搬を強行しようとするスト破りの暴力団との間にたえず小ぜり合ひがくりかへされ、市民も組合側に加はり、そのたびに怪我人が出て、いつ解決するとも知れなかつた。(八)

地元民でありながらコミュニティから浮いている駒沢の孤独はますます際立つのである。

(4)

ここまで、出身地にもかかわらず、駒沢は、近江のコミュニティか

ら疎外された存在であることを見てきた。次に、本作において主要な舞台であり、近江を代表する場でもある琵琶湖（近江八景）や彦根城から三島がどんな意味を引き出し、どのようにそれを物語に付与していったのか、について考えてみたい。

物語の冒頭に登場する近江八景は、諸説あるが、室町時代から江戸期にかけて成立したと言われており、歌川広重によって描かれた名所絵「近江八景」によって全国的に有名になった。それぞれ「瀬田の夕照」「石山の秋月」「粟津の晴嵐」「三井の晩鐘」「唐崎の夜雨」「比良の暮雪」「堅田の落雁」「矢橋の帰帆」と名付けられた琵琶湖南部の景勝地である。駒沢は十大紡の社長を招き京都嵐山の割烹旅館で接待した翌日、遊覧船をチャーターしその近江八景を案内するというもてなしを計画する。近年めざましい力を付け、十大紡に並ぶまでに会社を成長させた駒沢は、成り上がり者の負い目もあって、老舗企業の社長たちに、経済力のみならず、風流心までも認めてもらおうと考えたのだ。しかし、こんな「田舎くさい接待」（一）に辟易していた客人たちは早々に帰ってしまう。そもそも「洗練されて」いた客人たちにとって駒沢の目論みは笑止以外の何者でもなかった。このエピソードは、島内が既に指摘しているが、夏川が行った彦根荒神山における（松茸）接待や、長良川での（鵜飼）接待にヒントを得ていると思われる。夏川は締めり屋だったが、必要な金は惜しまぬ男であったらしく、百名以上の関係業者（主として銀行などの金融系）を招待し、二十人の芸者を用意するなどの派手な接待を実行していた。三島は、吝嗇な駒沢の派手な接待という枠組みはそのまま採用しているが、場を近江八景に設定し直している。この点はやはり注目すべきだろう。⁽²⁸⁾

戦後、琵琶湖をはじめとした滋賀の自然は、近代化に伴って相当蝕まれていった。宅地開発に伴う遺跡の破壊、湖畔に立ち並ぶ風俗施設、工場建設による公害などが原因である。自然破壊の影響は、八景も例外ではなかった。「戦後、比良の暮雪を除いて（中略）いずれもはや観光の対象とはなくなってしまった」⁽²⁹⁾のである。作中にも「枯れ果てて跡ものこさぬ唐崎の松」（一）、「粟津は一面の工場街で、枯れのこる松の数は、栗林する煙突の数とは比べものにならなかった」（同）等の描写がある。そこで昭和二十四年、琵琶湖が日本初の国定公園に指定されたことをきっかけに滋賀県と琵琶湖観光協会主催で公募が行われ、新観光名所として「夕陽 瀬田・石山の清流」「煙雨 比叡の樹林」「涼風 雄松崎の白汀」「曉霧 海津大崎の岩礁」「新雪 賤ヶ岳の大観」「月明 彦根の古城」「春色 安土・八幡の水郷」「深緑 竹生島の沈影」からなる琵琶湖八景が制定された。荒神山や長良川を琵琶湖に置き換えるにあたって、近江八景ではなく、現在ではより景勝地としてふさわしい、制定したての琵琶湖八景であっても良かったわけだが、三島はあえて前者を採用した。一つには駒沢の浮世絵コレクションのくだりを盛り込み、野暮な田舎社長としてのイメージを付与する、という理由があっただろう。そして今一つには、駒沢が信じる、古くさい、時代遅れの（家族主義）を表象する意図もあったのではないだろうか。それは、最終的に「じめじめした絹的なもの」⁽³⁰⁾に惹かれる岡野の脳裏に、この八景巡りが鮮やかに記憶されていることから言えるだろう。

一方、物語展開において重要な場となる彦根城はどうだろうか。この城は、「治部少に過ぎたるものが二つあり 島の左近と佐和山の城」

と詠まれた名城佐和山城を廃するため井伊直政によって築城された。

国宝の天守閣をはじめとして、重要文化財である櫓や門、玄宮園や楽々園といった庭園が現存している。日米修好通商条約、安政の大獄、桜田門外の変と日本が近代化の道歩む上で重要な役割を果たした井伊直弼は、直政から数えて十三代目の藩主であった。

紅葉よりも「古びた木造の壁の色や、赤錆びた屋根の色」(三)の建物に魅せられるという岡野は、「気高く首をたてた白馬のやうな」

(同) 天守閣から望む景色を眺めながら、かつての為政者に軽い嫉妬を憶える。天守閣はまさしく権力の、それも「晴れやかな闊達な」力の象徴であった。争議が起こり、わが娘も同然と思ってきた女子工員に旗竿で乱打された駒沢が俄に行きたいと言いだしたのもここである。最上階へ登り、「眼下の湖畔の工場の煙突」(同)を見下ろすことで、彼は自らの力を再確認しようとしたのだろう。しかし、風雨に晒された天守閣は、「威風といふよりは、不機嫌にうづくまつてゐる鎧武者のやう」(同)に見えた。眼下の絹紡工場も、綿フス工場も、女子寮や倉庫も黒ずんで映る。廃城令こそ免れたもの⁽³¹⁾、かつての権威はもうここにはない。主のいない城は、階段の踊り場で埃に埋もれた鯨のように、「世界のもろもろの意味のある配列から外され」(同)た存在であった。権威を保とうとやって来た駒沢はしたたかに、自分の置かれている状況を認識させられる羽目になる。

彦根城、近江八景は「かつてあり、今ここにはない」もの、「失われた権威」の表象としてこの物語で用いられている。そしてそれらは見事に駒沢の境遇とシンクロしているのである。

(5)

三島が近江という地を通じて描いたものは、コミュニティに同化しない人間の孤独であった。それは三島文学のどこへ繋がっていくのだろうか。

作品の舞台は大阪本社、あるいは岸和田や富士宮といった地方に広がることはなく、彦根に限定された。それは長い歴史を持ち、古くから商人の国であったこの地において、地元の名士の家柄にもかかわらず、受け入れられなかった夏川(＝駒沢)という人物に対する三島の興味からだと思われる。本作では、長男(庶子)は戦死し、駒沢一人で会社を切り盛りしていることになっているが、実際の近江絹糸では夏川を筆頭に彼の五人の兄弟が最高幹部に就任しており、その他一門の親戚知己が要所要所を固めている同族会社であった。夏川にはそれでも家族があったが、三島はそれさえも駒沢から剥奪してしまっているのである。性的マイノリティであった三島が家族の形に固執し、『精神上の』親子関係⁽³²⁾を繰り返し描いてきたことは拙論で言及したとおりだが、ここでも、その擬似的な関係が幻でしかないことを改めて描いている。奥野健男⁽³³⁾は、三島がこの争議のどこに興味を持ったのの理解に苦しんだというが、繰り返し描いた『精神上の』親子関係⁽³⁴⁾が見事なまでに崩壊した生の形を見逃すはずはなかっただろう。

『絹と明察』の中には、長らく京都の国立「療養所で病を養つてゐる」(四)駒沢の妻房江が、「グラフ雑誌の切抜き」の、皇室御一家の写真⁽³⁴⁾(同)を壁に飾っているという場面が出てくる。牟田和恵は『国民の父母』としての天皇・皇后という一対の男女カップル像を提示し

浸透させることにより、ヘテロセクシュアリティ（異性愛）に基づく社会秩序としてのジェンダーの秩序を強力に浸透させる契機となった」ことを指摘する。すなわち国家の父たる天皇とその赤子という擬似的な親子関係を作りだし、民衆の忠誠を日本近代化推進の原動力にしようとした家族国家観のもう一つの産物として、異性愛に基づくジェンダー秩序の構築がなされたと言うのである。夫を助け不眠不休で働いた末、不治の病にかかった駒沢の妻房江は石女であった。その彼女が、理想の（家族）としての皇室御一家の写真に飾っているのは相当な皮肉である。房江が、大槻を養子にしてもいいと口にした駒沢に対し、「あのくらゐの男はんは、心が硬いもんや。見かけはどないでも、心はちちんと、寒餅のように硬いもんどつせ」（四）とあからさまな嫌悪を見せるのは、（家族）を作りあげることの出来ない石女のささやかな抵抗である。駒沢は天皇よろしく、工員達を我が子と思い、擬似的な親子関係をそこに見いだそうとした。しかしそれも無残に打ち砕かれる。

三島は、異性愛を正当なものとするジェンダー秩序に違和感を覚え、近代的な家族を否定した。そしてその代償として擬似的な親子関係を求めるのだが、それさえも幻であったと気づく。「顔の絹の肌のやうに万事がつるりとして、民衆を軽んじながら民衆と一体化し、古井戸を掻い出しながら地霊と親戚附合をし、自分の善意を一度も疑つたためしかなかった」（五）駒沢は、国家秩序を保つために、国民の父となった、もっと言うならば、人間にされてしまった天皇^(3,5)である。三島は天皇Ⅱ駒沢を葬ることで、自身が絡め取られてしまった家族国家観への批判を試みたのだ。

三島が生まれた大正十四年、農商務省が農林省と商工省に分離され、父梓は農林省の蚕糸局へと配属された。「じめじめした絹的なもの」との闘いは、その生誕の時より始まっていたのかもしれない。

注

- (1) 三島由紀夫「著者と一時間『絹と明察』」（昭和39・11・23『朝日新聞』）。
- (2) 三島由紀夫「受賞者のあいさつ（毎日芸術賞『絹と明察』）」（昭和40・1・19『毎日新聞』）。
- (3) ジョン・ネイスン著・野口武彦訳『新版・三島由紀夫―ある評伝―』（平成13・8 新潮社）。但しネイスンはこの話を断っている。
- (4) 杉本和弘「『絹と明察』と近江絹糸争議のあいだ」（平成4・12「名古屋近代文学研究10」）、「『絹と明察』の『日本』」（平成6・3「国際関係学部紀要12」）。林進「三島由紀夫『絹と明察』とその背景―失われた日本を求めて―」（平成23・2「大阪大谷大学紀要45」）。竹松良明「『絹と明察』論―天皇制にかかわる形象化をめぐる―」（松本徹・佐藤秀明・井上隆史編『三島由紀夫論集Ⅰ 三島由紀夫の時代』（平成13・3 勉誠出版））。佐藤泉「『絹と明察』の死角―生産性向上運動と五〇年代文化運動―」（平成16・11「國學院雑誌105（11）」）。島内景二「『絹と明察』の光と闇を明察する―新出の三島由紀夫旧蔵書を手がかりとして―」（平成18・1「電気通信大学紀要18（1）・（2）合併号」）。
- (5) 高宮太平「夏川嘉久次と紡績事業」（昭和34・11 ダイヤモンド社）、宮島尚史「人権争議 近江絹糸労働者のたたい」（昭和30・10 法律文化社）、「ダイヤモンド産業全書7」（昭和36 ダイヤモンド社）、水野良象「綿・羊毛・絹読本」（昭和32 春秋社）。
- (6) 猪木武徳「文学者の見た近代日本の経済と社会④ 三島由紀夫『絹と明察』」（平成13・5「書齋の窓504」）。
- (7) 朝倉克己「近江絹糸『人権争議』はなぜ起きたか 五年間の彦根工場潜在活動を経て」（平成24・9 サンライズ出版）。
- (8) 上野輝将「近江絹糸人権争議の研究―戦後民主主義と社会運動―」（平

- 成21・2 部落問題研究所)。
- (9) 近江絹糸では昭和二十一年三月から四月にかけて労働組合が既に結成されていた。しかし実態は、組合長・執行役員は重役が指名する、大会と称して映画会・演芸会が行われるなどといった「おおよそ労働組合とは縁遠い」(上野輝将「前掲書」)組織であった。
- (10) 注(4)に同じ。(杉本和弘『絹と明察』の『日本』)。
- (11) 注(4)に同じ。(島内景二)。
- (12) 「三島由紀夫『潮騒』論」歌島の(道徳)、芸術家の(道徳)——(平成18・12「広島女学院大学国語国文雑誌36」)、「三島由紀夫『美しい星』論——円盤飛来地の意味するもの——」(平成21・12「近代文学試論47」)。
- (13) 今西明『近江から日本史を読み直す』(平成19・5 講談社現代新書)。
- (14) 原田敏丸・渡辺守順『滋賀県の歴史 県史シリーズ25』(昭和47・6 山川出版社)。
- (15) 「運命を賭けた“労使”の決戦 近江絹糸の『騒動』を現地に視る」(昭和29・7「ダイヤモンド27」)。
- (16) 注(14)に同じ。
- (17) 注(15)に同じ。
- (18) 注(7)にて確認することが出来る。
- (19) 注(7)に同じ。
- (20) 注(5)に同じ(高宮太平)。
- (21) 注(8)に同じ。
- (22) 法政大学大原社会問題研究所編『日本労働年鑑 第28集』(昭和30・11 時事通信社)。
- (23) 注(4)に同じ。(島内景二)。
- (24) 小田匡保「日本における仏教諸宗派の分布——仏教地域区分図作成の試み」(平成15・3「駒沢地理39」)。
- (25) 注(8)に同じ。
- (26) 早田リツ子『工女への旅——富岡製糸場から近江絹糸へ』(平成9・6 かもがわ出版)。
- (27) 注(4)に同じ。(島内景二)。
- (28) 注(4)に同じ。(島内景二) 島内は、長良川での鶴飼い接待の際、琵琶湖の案内もあつたことを明らかにしている。
- (29) 注(14)に同じ。
- (30) 注(1)に同じ。
- (31) 廃城令は明治六年一月に出され、城の一部、もしくは全てが取り壊され、陸軍の兵営地となった。が、彦根城は特例として保存が認められた。
- (32) 拙論『鏡子の家』から『午後の曳航へ』——(空間)にみる(時代)——(平成17・12「広島女学院大学国語国文学誌35」)、「三島由紀夫『禁色』論——記紀への遡及——」(平成21・7「広島女学院大学日本文学19」)。
- (33) 奥野健男『三島由紀夫伝説』(平成5・2 新潮社)。
- (34) 牟田和恵「家族国家観とジェンダー秩序」(『岩波講座 天皇と王権を考える 7 ジェンダーと差別』平成14・9 岩波書店) 牟田は近代国家観によつて「並ぶものなく『高貴』であるがゆえに男女の性を浮遊する存在でもあつた天皇を、ある意味では引きずり下ろし、身分や身体の多元性をぬき去つて『男』『女』の二元論に天皇をも巻き込んでジェンダーの秩序を画一的に、可視的に、顕在化させて普及させた」とも述べている。
- (35) 柳瀬善治『絹と明察』・『月澹荘綺譚』・『天人五衰』——認識を超えるものの表象について——(平成8・12「近代文学試論34」) 柳瀬は三島が村松剛に漏らした、天皇は駒沢だという発言や、磯田光一に語つた、桃色の肌は人間天皇に対する風刺だという言葉から、『絹と明察』には現代日本の象徴たる天皇への呪詛が描かれていると見る。
- 三島由紀夫の文章は全て、「決定版三島由紀夫全集」(平12・11〜17・12 新潮社)に拠る。
- 引用文中の旧字は全て新字に改めた。

(く)ない ゆみこ 比治山大学現代文化学部講師